



野口琢郎さん(中央)を招いて開かれた「Land scape#50」岐阜市楽座図の鑑賞会。岐阜市役所市民交流スペース(ミニナト)で、野口さん(中央)がマイクを持って話している。背景には大きな「Land scape#50」の作品が展示されている。

「箔画」で岐阜の発展表現

岐阜市役所の市民交流スペース「ミニナト」に展示されている箔画「Land scape #50」岐阜市楽座図。国内外で活躍する箔画作家・野口琢郎さん(49)「京都市」が制作した縦2.5メートル、横5.5メートルの大作で、2021年に岐阜信用金庫とぎふしん記念財団が岐阜市に寄贈した。先月、同所で鑑賞会が開かれ、野口さんと、作品監修を務めた加藤栄三・東一記念美術館の山本真一館長が、箔画の技法や作品の見どころ、制作の裏話などを紹介した。(田代理加)

岐阜市役所の市民交流スペース「ミニナト」に展示されている箔画「Land scape #50」岐阜市楽座図。国内外で活躍する箔画作家・野口琢郎さん(49)「京都市」が制作した縦2.5メートル、横5.5メートルの大作で、2021年に岐阜信用金庫とぎふしん記念財団が岐阜市に寄贈した。先月、同所で鑑賞会が開かれ、野口さんと、作品監修を務めた加藤栄三・東一記念美術館の山本真一館長が、箔画の技法や作品の見どころ、制作の裏話などを紹介した。(田代理加)



「岐阜市楽座図」の制作過程などを語った野口琢郎さん＝同

金華山が作品の核に

山本 箔画は、日本画でも洋画でもない新しいジャンル。箔、銀箔、プラチナ箔などを貼って創作する。赤や青は銀箔を科学変化させることで表現している。色を強調させるためにアクリル絵の具を塗り重ねることもある。

野口 家業が京都西陣の箔屋で、自分は5代目。箔屋に伝わる装飾技法として、和紙に金箔などを貼って西陣織の帯に模様を施す「箔引」がある。自分は、美術系の大学で絵画を学んだこともあり、この技法を活用したアートに挑戦した。「箔アート」「箔絵」と名称を考え、最終的に「箔画」と自分で名付けた。

漆を接着剤代わりに金や発展を感じられ、できる

川に沿って時代変遷

山本 この作品の大きな見どころは、真ん中を貫く長良川に沿って、異なる時間軸が描かれていること。まずは中世から現代への流れ。最上流となる右端、金華山東麓の雲には土岐氏の桔梗紋、中腹付近には斎藤道三の三頭立浪紋、かつて「楽市楽座」が開かれていた辺りには織田信長の家紋(織田木瓜)が、そ

それぞれ描かれている。さらに左へ目をやると、雲からのぞいた市街地に現代の新庁舎が立っている。反対に、下流から上流へさかのぼって見ていくと、鶴飼や花火などの風物詩が描かれ、春から冬へ季節の遷移が表現されている。野口 例えば、金華山の左側はツブラジイが輝き、右側は紅葉している。

ん中を雄大に流れていて、まさに「天下を取ったような気分」になった。金華山が作品の核になると思った。いつもは風景を想像して創作するが、今回は初めて現場を視察して描いた。新しい挑戦になった。京都をテーマにした2016年作の「Land scape#35」洛中洛外図は四角い雲だった。街並みも角張っている。雲との区別が少し分かりづらい部分もあった。今回、そこを試行錯誤する中で、「丸い雲を思い付いた時に」これは絶対良い作品になる」と直感した。

山本 よく見ると、道路には車がたくさん走り、街の中には人物や猫なども描かれている。

野口 雲間からのぞいている学校には、それぞれの校章も入れた。

山本 新庁舎のこの交流スペースに飾るため野口さんに制作を依頼した。朝と夕方の光では「金色の雲」の輝き方が違うし、立つ位置や眺める角度によっても見え方は変わってくる。市民の皆さんに、ぜひ細部までじっくり見てもらいたい。